HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	琴線に触れる感性 : 美的価値の経験へ
Author(s)	野坂, 政司
Citation	2010 秋季 韓国基礎造形学会 国際学術大会(2010 KSBDA International Fall Conference & Exhibition). pp.13-14. 2010.11.20. Gachon University of Medicine and Science. KOREA.
Issue Date	2010-11-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/44847
Type	proceedings (author version)
File Information	nosaka_1.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

琴線に触れる感性：美的価値の経験へ

Kansei　to touch heartstrings
To an experience of aesthetic value

野坂政司
北海道大学　教授
Masashi Nosaka
Hokkaido University, Professor

Key words：.Kansei, experience, aesthetic value, ecological information

Summary.
An idiomatic expression, 'to touch heartstrings' comes from a story of the Chinese classics that there was a deep sympathy between performances by a Chinese virtuoso of harp and response from his best friend. This is a good example of the Kansei. The sense of beauty to lead creative activity is tinged with a specific quality of each individual, region or culture. Functions of Kansei are considered on the basis of comparative discussion of three precedent studies about the development and aspects of Kansei. In an advanced information society, an experience to contact with 'ecological information' is a good chance to discover fundamental experience in a relationship between objects and self. When changes of the value of the experience occur in its process, it is an opportunity for Kansei to be vitalized.

1　琴線に触れる

『日本国語大辞典』（小学館）では、「琴線」を「(物事に感動する心情を琴の糸にたとえていう)人間の心の奥深くにある感じやすい心情。感動し共鳴する心情」と定義している。この表現の履歴を遡ると、中国の春秋戦国時代の『列子』にたどり着く。『列子』「湯問第五」には、琴の名手である伯牙とその友人の鍾子期の交わりが琴の演奏を焦点として紹介されている。伯牙が琴を演奏するときの感情や心境を、鍾子期は余すところなく言い当てるので、伯牙は「きみがわたしの意図として想い描くものは、わたしの心とぴったりである。わたしの琴の音がきみの耳をのがれる場所は、どこにもないのだ」(『列子 2』、p. 80) と述べたという。

この話は、伯牙の演奏者としての力量と、鍾子期の聴き手としての力量が、同じ高みに達したところで共鳴しているという希有な関係を示している。さらに、伯牙の演奏を聴いて鍾子期が体感したことを言葉にした内容が、伯牙の意図を正確に捉えていることで、伯牙を驚愕させたのである。ここには、経験、その表現、その受容という創造的な感性のはたらきの過程で生じた至福の関係が存在している。

それは、「伯牙絶弦」という言葉で残されているように、鍾子期の死により自分の琴を理解してくれるものがいなくなったので、伯牙が琴を壊し、弦を断ち切って二度と琴を弾くことがなかったという話（『呂子春秋』、p.311）と表裏の関係にある。

2. 言葉は浅く、意（こころ）は深く

『堀口大學詩集』の扉の裏の前書に、自分の詩の理念を宣言したものと見なされる「言葉は浅く／意（こころ）は深く」（堀口、p.1）という 2 行がある。この表現は、意の深さに十分に応える言葉の深さを持つ詩を書こうとする美的態度とは対極的な関係にある。

意の深さに十分に応える言葉の深さを持つ詩が固有の美意識に導かれて創造されるのと同様に、言葉は浅く、意は深く書かれる詩も固有の美意識に導かれて創造されるのである。それぞれに固有の美意識から書かれる詩は、異なる判断基準に基づく美的価値に支えられている。

堀口大學は、「言葉は浅く、意は深く」詩を書こうとする。彼の言語感覚に共鳴を覚え、このような美的価値を承認する経験を重ねてきた読者は、彼の言葉を明快にかつ十分に理解できるであろう。しかしながら、このような美意識は、個人的、地域的、文化的な偏差としての固有性を帯びるものであり、伯牙と鍾子期の関係のように深い共鳴が生じることは実に稀なことであろう。そうであればこそ、物事に感動し、それをすばらしいと知覚する能力がはたらくこと自体をまず問題化しなければならない。

3. 感性の発達、感性のはたらき

梅澤啓一は、『感性と造形表現』において、感性発達の基本法則を提示することと、発達過程のメカニズムを明らかにすることを試み、その中で感性を「形態価値意識」と定義し、それを「すなわち現実形態に感性的な価値を認める意識」（梅澤、p.150）と言い換えている。

佐々木健一は『日本的感性』において、和歌を素材として日本的感性について考察し、その特性である「ずらし」と「触覚」のはたらきを明らかにしようとした。佐々木によれば、「感性とは、対象の(あるいは世界の)性質を知覚しつつ、私のなかでのその反響を倍音として聴くはたらきである」（佐々木、p.10）。

桑子敏雄は『感性の哲学』において、「感性とは、自己の空間的配置と時間的履歴を身体的自己が感知する能力である。このとき、配置と履歴は、相互に不可分な関係にある」（桑子、p.221）と定義している。

以上の三者は、感性のはたらきを捉えることにそれぞれかなり成功していると考えられるが、相互に微妙な差異がある。とりわけ、梅澤による感性の定義が「価値を認める意識」を明示的に含んでいることは、佐々木、桑子の定義との違いを具体的に示すものである。一方、佐々木と桑木の共通点は、対象と自己とが身体的に共鳴する関係性の中で感性のはたらきを捉えていることである。また佐々木と桑木は、感性が「ずれ」や「逸脱」を肯定的・積極的に受容するものであると捉えている点において共通している。梅澤は、創造的な造形表現活動をする「機能的側面は、感性的価値づけの新しい局面に直面してそれまでの内容的側面が対応できるか否かが問われる際、内容の古い質と生まれた新しい質との落差が意識される時生じる。そして内容を形成していたシステムの均衡が崩れ新しい枠組の形成によって再び均衡が回復された時、内容的側面の質が高次化する」（梅澤、p.84）と「落差」、「均衡の崩れと回復」という概念を用いて感性の発達の構造を示している。その点において、梅澤は、佐々木、桑子と同じ方向での主張を展開していることになる。

4. 息づく感性としての経験へ

先進的な情報通信技術によって高度に情報化された社会に生きる私たちの感性は、創造的な製作の現場においても、創造的表現を受容する場面においても、技術の革新による社会環境の変化と無縁ではいられない。感覚情報を提供する電子機器の開発と普及による影響は、創造的作品の提示の手法や受容の過程の深層に広く及ぶであろう。このような情報的環境の陰で、世界に身体的に触れる直接的な経験は濃密な生の重さを抜き取られているのではないか。

エドワード・S・リードは、『経験のための戦い』において、アメリカ大陸全体をおおう情報スーパーハイウェイの開発と整備から取り残されている最も大切な「生態学的」情報が、「われわれが事物を独力で経験することを可能にする情報」（リード、p.12）であると指摘し、「生態学的情報は、世界におけるわれわれの場所の理解にとって一次的なものであり、処理情報は二次的なものにすぎない。現代生活によって混乱をきたし劣悪になったのは、一次的経験と処理された経験の間のまさにこの関係である」（リード、p.13）と述べ、一次的な経験を擁護する。リードにとって、生態学的情報とは、五感の知覚のはたらきで環境から獲得する情報であり、それは生きて成長していくために根本的な役割を果たす知覚的経験を決定する。

生態学的情報に結びつく経験は、対象と自分との関係において価値ある経験として積み重ねられていく。その過程で経験の価値の強化、拡大、組み替えが生じる時、それは感性が息づく契機となる。「琴線に触れる」とは、まさに感性が目覚める経験なのである。

＜参考書目＞

『列子（２）』「湯問第五」（平凡社、東洋文庫,1991）
『呂子春秋』巻第一四孝行覧第二［本味］（有朋堂書店,1920）
堀口大學『堀口大學詩集』（五月書房,1979）
佐々木健一『日本的感性―触覚とずらしの構造』（中公新書,2010）
桑子敏雄『感性の哲学』（日本放送出版協会,2001）
梅澤啓一『感性と造形表現―その発達のメカニズム―』（晃洋書房,2003）
エドワード・S・リード『経験のための戦い―情報の生態学から社会哲学へ』（新曜社,2010）